

学校法人尚学学園沖縄尚学高等学校附属中学校 3年 上原 晴美

私には、三つはなれた「兄」がいるはずでした。

臨月を迎えた母はその夜、お腹に少しの違和感を覚えたそうです。しかし、迷った末、病院に行かず様子を見ることにしました。なぜなら、翌日が定期の診察の日であり、当時は診察費が保険適用外で、八千円程かかってしまうからでした。

翌日、病院の医者は言いました。

「心音が聞こえません。あと半日、早ければ……」と。母は、“元気に産んであげられなかった。あの時、すぐに病院に行けば……”と深い後悔で苦しんだといいます。

妊婦さんが安全に、また健康に赤ちゃんを産むためには、最低十四回の健診が必要だそうです。しかし、その妊婦健診は五年程前までは、一回当たり数千円から一万数千円の診察費がかかってしまいました。多くの妊婦さんが、自分の診察を受けるよりも、生活を優先させて、診察の回数を減らしたり、受けなかった事などがあったようです。その為に、様々な悲しみが生まれたのかもしれない。そこで今、日本では、妊婦健診十四回無料というシステムで、各地の市区町村で助成が行われています。それは、全ての妊婦さんがお金の心配をせず、いつでも診察を受けられるよう、国の社会保障費から充てられているものでした。「税金」が、命の誕生のために的確に使われ、大きな力となっていたのです。

また、私は今年の春、県主催の国際交流事業の一環で、「香港」派遣に参加しました。初めての海外に緊張しながらも、沖縄とは異なる言語や環境の中で、現地の中学生と英語で交流をし、コミュニケーションの素晴らしさを肌で感じました。その中で、新しい発見に胸を膨らませたりと、私自身、世界へ視野を広げる大きなきっかけとなったのです。このように、未来を担う私達が世界との交流を一步一步築いていけるよう、ここでも「税金」が使われていました。

私は「税」が社会の中でどのような仕組みで、またどのように使われているのか具体的にはわかりませんでした。しかし、今回、兄の話や香港派遣を体験する事で、税金は私達が安心な暮らし、明るい未来に生きるために、そして、弱い立場で苦しんでいる人達の生活を守り、寄り添うために活用されていたのだと実感として学ぶことが出来ました。

皆が納める「税金」には希望と思いやりを形にする力があります。懸命に働き、納税の義務を果たすという責任が、社会の土台を作り、その中で私達は成長させてもらいました。だからこそ、その恩恵を受けた者が感謝の心を忘れず社会に尽くしていく。どんな「命」も救われる温かい社会、希望溢れる「未来」を築くために。皆の温かい心がつまった『税金』で、自身が深められた事に誇りを持ち、納税の義務を果たす人になりたいです。

母と「兄」の思いに応えていくために一。